

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009 年度～2011 年度

課題番号：21720324

研究課題名（和文） 性からみるオリシャ崇拝の変容：
アフリカ由来の宗教を实践するアメリカ黒人の社会運動研究課題名（英文） Orisa Worship and its Transformation:
How Gender Works in the African American Socio-Religious Movement

研究代表者 小池 郁子 (KOIKE, IKUKO) 京都大学・人文科学研究所・助教

研究者番号：60452299

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、アメリカ黒人の社会運動において、性（ジェンダーとセクシュアリティ）がどのように位置づけられてきたのかを、アフリカ由来の神々、オリシャを崇拝する運動を事例に考究した。そのうえで、「少数派のなかの少数派」として強調されることの多い黒人女性や、黒人の男性同性愛者が、オリシャ崇拝運動といかに関わってきたのかを文化人類学的視点から考察した。また、彼らが運動と関わることで、宗教文化の实践や運動の实践形態がいかに変容したのかを分析した。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this study is to examine how gender and sexuality construct and reconstruct the social space of the African American socio-religious act or “Orisa Worship movement.” This study scrutinizes the way African American women and homosexual men, often labeled as “minorities within minorities” throughout the history of the black movement in the US, have been engaged in this social activity for the past 60 years. This research then reveals the transformation of the cultural/religious practices of participants as individuals as well as members and the political structure of the socio-religious movement by the engagement of those minorities.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
21 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
22 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
23 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：社会運動、性、人種（民族）、男性覇権主義、オリシャ崇拝、植民地主義、アメリカ黒人、ナイジェリア（ヨルバ）

1. 研究開始当初の背景

これまでの研究では、アメリカ黒人（アフリカ系アメリカ人）による社会運動について、その歴史的展開を追いつつ、文化人類学の視点から調査研究をしてきた。その過程でえられた研究開始当初の背景について、以下に述べる。

本研究が対象とするオリシャ崇拝運動は、アメリカ黒人の社会運動の一つである。このオリシャ崇拝運動は、1950年代半ばのアメリカ合衆国で、公民権運動が広がりを見せるなか、「反白人・反キリスト教」を掲げて始動した。彼らは、アメリカ黒人にはみずからの文化を实践する場所が必要であるという思想哲学から、アメリカ南部に、オヨトゥンジ村という一種のコミュニオン（生活実践共同体）を拠点として建設し、そこでオリシャを崇拝し、ヨルバの伝統的な生活様式を再現しようとした。

こうした研究開始当初の背景を踏まえたうえで、本研究では以下の事象に着目するに至った。

オリシャ崇拝運動は、その当初、黒人としての集団的同一性を強調するあまり、男性覇権主義、異性愛主義的な運動を展開した。そのため、運動に参加した性的少数派は、様々なかたちで抑圧された。その一例は、一夫多妻制を流用した男性覇権主義の強要である。しかしその後、性的少数派は、運動のなかでみずからの権利を主張し、運動の性質を変化させようと試みた。また、アメリカ黒人は、「真正」とされるナイジェリアのオリシャ崇拝の技術・知識を求めて、ナイジェリアやキューバの崇拝者と交流することで、オリシャ崇拝にみられる性的規範と価値観を変化させ、新たな宗教実践を創造している。たとえば、女性がナイジェリアの慣習に習って、託

宣司祭として活躍できるようになったことがその例としてあげられる。

そこで、本研究は、現地調査をもとに以下の2点について考察する。(1)オリシャ崇拝運動は、性的少数派をめぐってどのように変容したのか、(2)アメリカ黒人のジェンダーとセクシュアリティは、ナイジェリアやキューバのオリシャ崇拝者との文化交渉においてどのように再構築されているのか。さらに、本研究は、性という視点からアメリカ黒人の社会運動を捉え直すことで、米国社会に根づく人種にもとづいた性表象や、性的人種主義において、人種と性がどのように交錯しているのかについて検討する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、アメリカ黒人の社会運動において、性（ジェンダーとセクシュアリティ）がどのように位置づけられてきたのかを、アフリカ由来の神々、オリシャを崇拝する運動を事例に考究することである。具体的には、本研究は、アメリカ黒人のオリシャ崇拝運動において、黒人のジェンダーやセクシュアリティがどのように捉えられてきたのかを、儀礼の実践、司祭の養成、宗教的位階、一夫多妻制、コミュニティの規律、宗教上の家族組織の構造などから明らかにする。そのうえで、「少数派のなかの少数派」として強調されることの多い黒人女性や、黒人の男性同性愛者が、オリシャ崇拝運動といかに関わってきたのかを文化人類学的視点から考察する。また、彼らが運動と関わることで、宗教文化の実践や運動の実践形態がいかに変容したのかを分析する。

そこで、本研究は、アメリカ黒人が西アフリカ、ナイジェリアの伝統宗教（ヨルバ民族のオリシャ崇拝）を核に組織した社会運動を、黒人のジェンダーとセクシュアリティとい

う文脈で捉え直すことを試みる。本研究は、以下に示すこれまでの研究成果をさらに発展させるべく現地調査をおこない、つぎの2点について考察する。(1)オリシャ崇拝運動は、性的少数派をめぐってどのように変容したのか、(2)アメリカ黒人のジェンダーとセクシュアリティは、ナイジェリアやキューバのオリシャ崇拝者との文化交流においてどのように再構築されているのか。前述したように、オリシャ崇拝は西アフリカを起源として、キューバ、さらに米国へと伝播し、現在、ナイジェリア人が実践する宗教の「真正性」をキーワードにトランスナショナルな文化交流がおこなわれている。

3. 研究の方法

本研究課題の研究方法は大きく4つにわけられる。

(1)資料文献の収集・精査

①アメリカ・アメリカ黒人関連：抵抗文化、若者文化、大衆文化。黒人運動（公民権運動、ネイション・オブ・イスラム、汎アフリカ主義、アフロセントリズム）。黒人らしさ、アフリカらしさ。第二次世界大戦以降の社会政治、文化、経済。人種、エスニシティ。性表象、身体表象、ジェンダー。宗教と文化的価値観（キリスト教・イスラーム・アフリカ系宗教・スピリチュアリティ）。

②ナイジェリア・ヨルバ人関連：ヨルバ・ディアスポラ、ヨルバ・ナショナリズム。オリシャ崇拝、イファ託宣、供犠。ポスト植民地期の社会政治、歴史、文化、経済。国内の宗教的競合（キリスト教・イスラーム・伝統宗教）。宗教的、社会的空間のジェンダー。

③ジェンダー・セクシュアリティ、文化人類学、植民地主義関連。

以上に関して、日本（東京ほか）、ヨーロッパにて資料文献の収集・精査をおこなう。

(2)資料文献の収集・精査をふまえた研究項目

①オリシャ崇拝運動における性的少数派
社会的少数派のアメリカ黒人による原理主義的な社会運動（いわゆる戦略的本質主義にもとづく運動）が、その内部に抱え込む少数派の黒人女性や、黒人男性の同性愛者に、どのような社会的、宗教的役割をあたえたのかについての調査。(a)婚姻関連：一夫多妻制、コミュニン内での内婚制、婚姻関係にない男女間の接触禁止(b)性統制：同性愛の禁止、(c)性別分業、(d)家族制度：独身成人女性と運動指導者との強制的婚姻、独身成人男性の隷属化、(e)宗教実践：女性託宣司祭の不認可。

②性的少数派の異議申し立てと運動の変容
オリシャ崇拝運動における性的少数派は、あたえられた社会的、宗教的役割にたいして、いかに賛同し、あるいは、異議を唱えたのか。それによって、社会運動の実践形態がどのように変容し、宗教文化実践がいかに再構築されたのかについての調査。(a)宗教の普及：女性託宣司祭の誕生と女性成員の急激な増加、(b)宗教文化の創造、再構築：宗教的地位における「女王」の地位の創造、ヨルバ以外の宗教的ジェンダーの借用、(c)結社活動：女性の権利を守る結社の形成、男性覇権的な成員の排除、青年層の男性育成を担う結社の形成。

③ナイジェリアで経験されるオリシャ崇拝の性
アメリカ黒人が、ナイジェリアのオリシャ崇拝組織を訪れた際に経験する、オリシャ崇拝の性の位置づけについての調査。(a)性表象と性的規範：神話や儀礼の解釈と実践、(b)性的分布と性的志向：男神、女神を司る司祭集団、託宣司祭の集団、(c)性別分業：崇拝組織（宗教上の家族）での活動、崇拝組織以外での活動、(d)宗教実践：崇拝実践にみられる性差、男性結社、女性結社への入社儀礼

とその役割。

④トランスナショナルな文化交渉と性の変容

アメリカ黒人のオリシャ崇拝が、ナイジェリアやキューバのオリシャ崇拝と交錯することで、アメリカ黒人のジェンダーやセクシュアリティは、宗教的規範、および、実践のレベルでどのように変容してきたのかについての調査。(a)性的規範の変容：男女別の性的忌避、(b)宗教文化の創造、再構築、(c)性的少数派がオリシャ崇拝を実践する意義、(d)人種と性表象の交錯。

③言語習得・翻訳

調査研究の対象であるアメリカ黒人とナイジェリア人がもちいるヨルバ語（ナイジェリアの主要三言語）の中級程度の文法、会話を習得する。そのうえで、儀礼にもちいられる用語や詠唱歌などの内容を記録、翻訳する。さらに、アメリカ黒人のあいだでみられるスペイン語化されたヨルバ語（オリシャ崇拝の儀礼用語）を翻訳する。

④ 学術発表・論文投稿

資料・文献精査の結果をまとめ、『ZINBUN』に投稿するとともに、そのほかの論文を執筆する。また、6月の「日本文化人類学会」、9月の「日本宗教学会」で学術発表をおこなう。

4. 研究成果

すでに別の項で述べたように、オリシャ崇拝運動は1950年代後半にアメリカで組織化された。この運動の当初の特徴として、ブラック・ナショナリズム（黒人分離主義）、伝統的価値観・生活様式の尊重、身体的な文化の実践、コミュニーの形成、脱都会志向などがあげられる。こうした特徴を踏まえて、本研究は、初期のオリシャ崇拝運動をブラック・ナショナリズムと伝統的価値観を軸に、人と人のつながりを形成する社会運動として注目した。それでは、ブラッ

ク・ナショナリズムや伝統的価値観をめぐっては、どのような議論がなされてきたのであろうか。ブラック・ナショナリズムに関しては、それを実践する社会空間の暴力性、閉鎖性が強調されており、社会や政治とのコミュニケーションが欠如する傾向にあると論じられている [中条 2002、本田 2005]。また、伝統的価値観については、性別分業などの伝統的価値観によってコミュニティが束縛されていると指摘されている [Clark 1997; Curry 1997]。あるいは、コミュニティ形成の際に、アフリカの伝統的価値観を強調しすぎると、家父長制を支える性規範、性役割が再強化されかねないとの議論もある [Girloy 2000]。

そこで、本研究は、ブラック・ナショナリズムのなかでも、とりわけ伝統的価値観を重視するオリシャ崇拝運動の変容過程をジェンダーとの関わりから明らかにし、運動の社会的、文化的変容能力の可能性について考察した。あわせて、アメリカ黒人の社会運動において、女性成員は米国社会と男性成員から二重に抑圧された被害者として論じられることが多いが [hooks 1992、萩原 1997、風呂本 2003、フックス 201(1981)]、本研究ではこの点についても検討を試みた。

以上を踏まえて、本研究は次のことを明らかにした。すなわち、オリシャ崇拝運動には、運動形態が変化したとはいえ、伝統的価値観を現在も重んじているゆえに、集合的崇拝拠点（オヨトゥンジ村）にせよ、個別崇拝組織（ハウス）にせよ、運動結成当初からの家父長的、男性優位主義的な実践がみられる領域もある。さらに、ハウスにおける男性結社や女性結社の活動などでは、自由労働イデオロギー [cf. 兼子 2008] にもとづいた「男らしさ・父性」を養成す

ることもあり、家父長的、男性覇権主義的な価値観を助長してしまうことも否めない。

たとえば、男性不在の家族形態は、アメリカ黒人男性の高い収監率によるものであり、アメリカ黒人男性が社会、つまり家族、学校、労働、地域社会から孤立する生活環境を再生産していると分析されてきた [ブラッドリー 2010(2008)、リーボウ 2001]。オリシャ崇拝の個別崇拝組織の活動では、男性成員の就職、就業支援から、不当な警察権力の行使から身を守る方法、息子-父関係のわだかまりの解消を通じた家族形成など幅広い活動がおこなわれている。そこでは、男らしさ・父性の構築が認められ、家父長的価値観に重きを置く従来のアメリカ黒人の社会運動と同様の問題を垣間見ることができる。

ただし、後述する別の観点も無視できない。オリシャ崇拝の宗教上の疑似家族や性にまつわる特徴は、大きく分けて三つある。①性ではなく、司祭歴をもとにした階級制度と宗教的疑似家族の形成、②一夫多妻制とその解釈、実践にみられる男女差、③性（性的なもの）に寛容な価値観（非-禁欲主義）である。ここでは、③についてももう少し詳しく述べる。

アメリカ黒人の家族は、経済学、社会学、都市人類学をはじめ、様々な領域において分析されてきたが、そうした分析にはある種の共通点をみいだすことができよう。その共通点とは、アメリカ黒人の家族を性の逸脱や男性不在の家族という視点から問題化、あるいは説明してきたということである [ブラッドリー 2010(2008)、リーボウ 2001]。そこでは、アメリカ黒人男性は白人女性の純潔を守るため、白人の監視下におかれるべき野蛮な存在として位置づけられている。一方、アメリカ黒人女性は、男性を精神・聖、女性を肉体・汚れとみなす米国の価値観のもとで、貞淑な

白人女性とは異なり、白人男性を誘惑する淫らな女性というように、二重の負のラベルを課されている [アンチオーブ 2001、萩原 2002]。つまり、オリシャ崇拝における性、とりわけ性（性的なもの）に寛容なだけではなく、ときには性を賞揚する価値観が、女性成員を負のラベルから解き放つ空間を創り出し、彼女たちをエンパワーメントする役割を担っているといえる。

これらの特徴によって、オリシャ崇拝運動の女性成員は従属的な地位に甘んじることなく、家父長的な社会運動そのものを変革しながら運動に従事している。女性成員は、ときには米国という国家の枠組みを超えたヨルバランドのオリシャ崇拝者や、民族の枠組みを超えた崇拝者とのつながりを築くことで、オリシャ崇拝のジェンダー規範を変容させている。

このことは、結果として、オリシャ崇拝という実践を軸に女性の地位を向上させるとともに、限定的ではあるが、男性のみが社会的、経済的な責任を負うべきであるという家父長的な価値観から男女双方の成員を解き放つ可能性をもたらすといえよう。また、本研究は、オリシャ崇拝を介して、アメリカとナイジェリアの間でトランスナショナルな、かつ限られた領域ではあるが非植民地主義的な宗教的空間が形成され、それがアメリカのローカルな社会のあり方の変革につながる可能性があるという宗教のダイナミズムを示唆している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

小池郁子

「コンタクト・ゾーンとしてのオリシャ崇拝運動——アフリカ系アメリカ人の社会運動とキューバのアフリカ系宗教との境界をめ

ぐって」
『コンタクト・ゾーンの人文学：宗教実践』
査読無、3巻、2012（印刷中）

小池郁子

「想像／創造されたアフリカ性の時間—アフリカ系アメリカ人のオリシャ崇拝運動の初期から衰退期をめぐって」

『時間の人文学—情動・自然・社会空間』査読無、2011、301-332頁

小池郁子

「 Changing Orisa Worship: Anti-White/Christian Ideology and the Black Relationships with Africa in the Yoruba American Socio-Religious Movement」
『ZINBUN』査読無、42巻、2011、63-85頁

〔学会発表〕（計 6件）

小池郁子

「アメリカ黒人のオリシャ崇拝運動にみる縁の形成とジェンダー」

日本宗教学会第70回学術大会、2011.9.3、
関西学院大学

小池郁子

「想像／創造されたアフリカ性の時間—アフリカ系アメリカ人のオリシャ崇拝運動にみる社会空間の変容」

第45回文化人類学会研究大会、2011.6.11、
法政大学

小池郁子

「黒人運動にみる祖先崇拝—アフリカとの縁から生まれる社会空間」

日本宗教学会第69回学術大会、2010.9.5、
関西学院大学

小池郁子

「コンタクト・ゾーンとしてのオリシャ崇拝運動—アフリカ系アメリカ人による社会運動の境界をめぐって」

第44回文化人類学会研究大会、2010.6.13、
立教大学

小池郁子

「西アフリカ、ヨルバの神々をもとめて—アフリカ系アメリカ人のオリシャ崇拝運動」
日本宗教学会第68回学術大会、2009.9.12、
京都大学

小池郁子

「アフリカ系アメリカ人の社会宗教運動にみる境界と越境—西アフリカの神々、オリシャを崇拝するコミュニティの実践から」
第43回文化人類学会研究大会、2009.5.31、
大阪国際交流センター

〔その他〕

小池郁子

「持続可能なコミュニティの形成—アフリカ系アメリカ人のオリシャ崇拝運動における拠点の聖地化」

『京都大学人文科学研究所 京都サステナビリティ・イニシアティブ研究報告 人文学から考えるサステナビリティ学の可能性』
（印刷中）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小池 郁子 (KOIKE, IKUKO)
京都大学・人文科学研究所・助教
研究者番号：60452299